

11. 変革期にある保健師教育：統合カリキュラムにおける公衆衛生看護学実習の実習経験内容分析と課題

獨協医科大学看護学部 地域看護学領域

相原綾子, 板垣昭代, 野尻由香, 塩澤百合子, 会沢紀子

【緒言】保健師教育は保健師・看護師の統合カリキュラム（以下、統合カリキュラム）から学部選択制への変革期を迎えている中、看護系大学数の急増に伴う統合カリキュラムの実習体験不足を示唆する研究は多岐に渡るが、現在も統合カリキュラムの中で展開される保健師教育の成果を評価する研究は見当たらない。そこで本研究の目的を、選択制を導入した保健師教育の実習体験評価に関する先行研究との比較から、統合カリキュラムにおける保健師教育の成果を評価するための基礎資料を得ることとした。

【方法】対象) 統合カリキュラムのD大学看護学部4年次公衆衛生看護学実習経験録112名分, 方法) 東京都特別区内の選択制7大学を対象とした先行研究で作成された実習で体験すべき15項目に準じてD大学の経験録から抽出し、都内7大学とD大学の①属性, ②実習概要, ③体験割合を比較した。

【結果】対象学生112人, 回収数102人(回収率91.1%)。①学生属性; 都内7大学は女性109人(95.6%), 男性5人(4.4%), D大学は女性95人(93.1%), 男性7人(6.9%)で有意差なし($P<0.043$)。②実習概要; D大学はA県内に9保健所・18市町の実習施設あり。実習期間3週間(都内7大学4週間)③体験割合; 15項目の平均が都内7大学・D大学共に8割以上であり、有意差のあるD大学の方が高い体験項目は「保健所の見学」、有意差のある低い体験項目は「訪問での体験」「問診体験」「関連機関見学」であった。

【考察・結論】実習受け入れ機関が潤沢に確保され、選択制と比べ実習期間は短いものの、体験項目の平均が8割以上と短期間で多様な保健師活動が体験できていた。これは、実習前に実習指導者と教員で進め方を協議し、実習環境を調整することで、選択制と同様の実習体験ができたと言える。保健師のみならず、地域看護の視点を持つ看護師が育成されていることは、統合カリキュラムの成果であると評価することができた。

12. 複雑転移を起こす腫瘍の転移機序の考察

獨協医科大学 医学部2年

郷間丈滉, 島野浩樹, 高崎史義

【目的】2017年度の解剖学実習において、二例のご遺体で特徴的な所見のある膵臓癌患者を見出したため、それぞれ症例について原発巣やその病態、原因となる癌の種類、転移経路について興味を抱き、調査を行った。

1例は膵臓癌から左腎臓への転移、もう1例は膵臓と直腸原発の重複癌が死因とされたご遺体であった。

【方法】肉眼観察及び病理標本を用いて研究を行った。また、臨床現場の先生方からいただいたアドバイスや、文献による調査を参考にした。

【結果】1例目の病理標本において、膵臓及び左腎臓で立方から扁平上皮の形をとる腫瘍細胞がみられた。それらは移行上皮に類似しており、特に左腎臓内では尿細管に腫瘍細胞を見出した。また、腎盂部にて腎盂上皮が次第に腫瘍細胞に変化していく所見を得た。

2例目の病理標本において、上部直腸には漿膜下から筋層にかけて腫瘍細胞が見られた一方で、粘膜上皮には腫瘍細胞は見られなかった。また、膵管にて膵管上皮細胞が徐々に丈の高い腫瘍細胞に変化するさまが観察され、膵臓では傍神経浸潤が見られた。

【考察・結論】1例目は死亡時の診断とは異なり、細胞の形態および原発巣の特定により、腎盂原発の移行上皮癌が尿細管を逆行性に上昇した後、膵臓やその周辺臓器に直接浸潤したものである可能性が高いと考えられる。

2例目は直腸粘膜上皮に腫瘍細胞が見られず、また膵臓癌の特色である傍神経浸潤が見られたことにより、重複癌ではなく、膵臓癌が原発であり、直腸の病変はその腹膜播種による転移と考えられる。

両症例において死亡診断書に記載された死因と本研究で得られた死因が異なった理由は、転移経路や転移先が臨床的にも珍しい症例であったため、また、臨床現場では、不用意な組織診は転移を促進するおそれがある等、患者の利益のために必ずしも病態特定のための最大限の医療介入が行われるとは限らないためと考えられる。